

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第28巻2号(通巻178号) 2006.7.14

vol.28

NO. 2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

栗原豪彦

## 2 古典的図書館とネット図書館

晴山雅寛

## 3 学術雑誌とOnline化

二瓶剛男

## 4 講義の準備と図書館

川谷茂樹

## 5 図書館はおそろしい

山中 亮

## 6 読書の場所

## 7 図書館レポート 2006

## 8 レオナルド・ダ・ヴィンチ展

編集後記

# 古典的図書館と ネット図書館

文= 栗原豪彦

(くりはら たけひこ/人文学部教授)

知識には、そのものを直接知っている知識とある情報を得るための検索方法に関する知識の2種類あるが、近年では後者の「知識」がますます重要になっている。どの専門分野でも出版点数は半端ではないし、もちろんウェブ上の関連情報は天文学的だ。分野の細分化と多様化ともあいまって、狭い関心分野のthe state of the art (最新の研究到達水準)の全体像をきちんと把握することも楽ではない。たしかに、活字になる前のドラフトがウェブで公開されることもめずらしくないし、ウェブの恩恵ははかり知れないが、一方で、もっともらしいjunk情報もあふれているから油断ならない。

こんな時代だから、図書館の役割も様変わりするのは避けがたい。最近、米国のネット検索大手のグーグルが日本でも年内にウェブ経由の書籍検索サービスを開始するとのも報道があった。欧米で先行したこのシステムは、従来型の検索より一歩進んで、出版社から書籍の提供を受け、本の内容をキーワードで検索させるものであり、将来は図書館と提携して、日本で出版されたあらゆる書籍のデータ化を検討している。さらに著作権問題が残っているものの、英米の複数の図書館と提携して、蔵書をデータ化して検索できる「ネット図書館計画」が進行中とのこと。ただし、このサービスは本の宣伝や販売に結びつくビジネスがらみの側面もあり、目指す書籍を無料で読めるという夢のサービスの実現は無理のようだ。

若者の活字離れがいわれて久しいが、国会で読書活動推進法のようなおせっかいな法律まで成立させなくてはならないほどの危機感はいささか異常である。慶応大学生らの調査報告でも日本全体での読書率は(たぶんケタ外れのベストセラーのような新書や実用的なビジネス書のお蔭で)むしろ年々上がっている一方、年代別ではやはり中高生の読書離れがすすんでいるという(大河靖知ほか(2001)「なぜ本は読まれなくなったか」<http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/semi/2001dokusho.pdf>)。理由としては、携帯電話やインターネ



ットなどメディアの多様化と競合、生活スタイルの変化などが指摘されている。昔から本を読まない学生は少なくなかったが、上記の要因がこの傾向を加速させているのだろう。出版業界の思惑もあって、中学生に読書を勧める「本屋のオヤジのおせっかい—中学生はこれを読め!」という札幌の書店が口火を切り、講談社主宰の「書店未来研究会」が後押ししている運動まで生まれた(『朝日新聞』2006年5月5日夕刊)。500点あるという推薦リストには新旧硬軟とりまぜて実に多様なジャンルの本がならんでおり、昔風の教養や文学の匂いが過剰でないのは時代というものか。こうした動きで昔の高校生や大学生にいたような知的スノブが復活する兆しはないものの、平均的若者の思考力や表現力がいささかなりと高まればよいのだが。

従来型の図書館の存在理由や利便性そのものはそう変わらないだろうが、情報の電子化はますます高度になり、古典的図書館とウェブ「図書館」の競合はさらに進むとみられ、結局、両者はそれぞれの長所を生かしながら共存していくことになるのだろう。

# 学術雑誌とOnline化

文=晴山雅寛

(はるやま まさひろ/工学部教授)

10数年前に本学に赴任するに当たり、私の専門分野(素粒子理論物理学)ではどのような学術雑誌を大学として購入しているのかを図書館にお聞きしたところ、「Natureのバックナンバーは揃っています」と言われました。「Natureだけですか%#@#★?」と困惑気味に答えるしか私には方法がなく、いまだに対応していたいた図書館職員の不思議そうな顔つきを思い出します。素粒子理論と素粒子実験をひとまとめにして高エネルギー物理学といいます。高エネルギー物理学分野でNatureからの引用論文数は限りなく0です。

背に腹は代えられぬ状況下では自分で買うしかありません。そこで購入できる雑誌の価格を調べると、外国の商業出版社の発行する雑誌は高すぎて無理であることがすぐにわかります。唯一買えそうなのが、アメリカ物理学会の発行する雑誌を、Surface Mailよりは少しましなAir Cargo便で購入する場合です。これでなんとか、研究に必要な論文数の60~70%が入ります。しかし欧米在住の研究者との間には致命的な時間差がつかまりました。余談ですが、今年は日本人で2人目にノーベル物理学賞を受賞された故朝永振一郎博士の生誕100年です。先生の偉業を後世に伝えるべく、筑波大学に朝永振一郎記念館が作られました。完成後、時の文部大臣が視察に見えた折、「朝永先生は戦後の焼け野原で雑誌も何もかも無い中で、ノーベル賞の栄誉に輝く仕事をされました」との説明に、「予算を付けなくてもノーベル賞級の仕事はできるのだねー!」と大臣は得心したそうです。朝永先生の頭脳には遠く及ばないし、ポケットマネーも小額ですから、私は何かをいっぱいあきらめて赴任した記憶と重なります。

アメリカ物理学会(旧名American Physical Society)の専門雑誌の1つPhysical Reviewが我が家に届けられる前に、時折東京の税関で開封されました。Physicalに怪しげな想像をし、Reviewに別の和訳

をされた税関職員 of 立派な職務行為だと想像します。これがあつてかは分かりませんが、本家アメリカでもつい最近、学会の名称をAmerican Physics Societyに変更しました。これで私もむきむきの肉体派の秘密組織の会員から晴れて開放されます。

この雑誌は研究室の本棚を1年に1段ずつ占領します。雑誌の表紙の色はブルーです。顔も部屋も青く染まりそうでした。そんな折に、アメリカ物理学会が電子出版を他の学会に先駆けて始めました。電子出版により世界中の物理学者が安い費用でOnline購読が可能になります。反面、世界中どこにいても時間差無しに情報が得られることから、もう言い訳はできません。負担重量の少ないハンディキャップ靴しか経験していない私は、年齢を理由に騎乗を時折辞退しても、表立って(?!)責め立てられず、馬齢を重ねてよいこともあるものです。

電子出版は、高エネルギー物理学分野ではかなり以前からPreprint Serviceに使用され、珍しくありませんでした。インターネットに関しても、プロトタイプブラウザであるモゼ(ザ)イクは欧州共同原子物理学研究所(CERN)に集まった研究者が共同研究のために自ら開発したものです。初期の電子出版はTEX(テック)のソースファイルをダウンロード後、コンパイルし、PS(Post Script)ファイルに変換するものでした。印刷には高価なPS-プリンターが必要になります。貧乏研究者は普通のプリンターを工夫してPSに化けたGS(Ghost Script)を使います。かくして高エネルギー物理学家から多くのコンピュータの専門家も生まれました。今は、プリンターにあまり依らないPDF-ファイルが主流になりました。

紙の出版物が減り無くなるかもしれない近未来に、古文書館ではない図書館はどんな姿になるのでしょうか。

# 講義の準備と 図書館



文= **二瓶剛男**

(にへい たけお／経済学部教授)

本格的な図書館を利用するようになったのは、やはり大学生になってからで、古くがっしりした石造りで天井の高い建物が、何となく居心地のよいものであった。とくに前期教養課程のときは、授業とサークル活動のためにほとんど毎日大学に出かけていたが、毎朝まずは図書館に向かった。当時図書館は本を借りるだけでなく、研究室もなく寮にも入らない学生にとってはよい勉強部屋兼休憩室となっていたのである。

大学に職を得てからは、図書館の大閲覧室は、往々にして雑用から逃れる避難場所となった。また1年足らずの海外研修では、図書館で与えられた閲覧室を研究室、というより連絡場所を兼ねた秘書(受付嬢)付事務室のようにしていた。

図書館を、もつぱら、本来の「文献が探せる&手に入れられる!」(『図書館だより』No.1、7ページ)所として利用するようになったのは、本学に赴任してからである。「国際関係」を講義するため、これまで以上に広い文献・資料を渉猟しなければならなくなったからである。政治や歴史や科学・技術など広範囲の資料をもつ図書館が、研究室に隣接し、「朝9時から夜10時まで開館している!」(同上)のはありがたい。「日本資本主義の岩盤を穿った」(有沢広巳)『日本資本主義分析』の著者は、大学を追われ毎日神田古書店を訪れ上野図書館を書斎代わりにしたということだが、生来の怠け者である筆者は、ただ講義準備のためだけ、しかも最も手近な所の往復ですましていくわけである。

この数年、講義準備だけでもお世話になった文献・資料は無数にある。なかでも『国連統計年鑑』をはじめ、各種・各国の統計集は、各国分析と国際的な総括を行ううえで欠かせない基本資料である。個別事例や個別の体験だけでなく、社会科学では大量的な事象の総括が重要だということは、学生諸君にも周知のことであろう。多年専門としてきた旧ソ連やロシアについては、基本統計年鑑がそろっているほか、全国地域別統計集や個別地域独自の統計資料なども利用できる。国際関係を分析するには産業連関表を利用しなければならない

い、とある専門家から御批判を受けたが、ロシアを含めて各国IO表の収集と分析はこれからの課題と考えている。

歴史に関する図鑑や写真はただ眺めていても楽しめる。厳密さを失わないかぎり、講義を出来るだけビジュアルにすることはたしかに必要で、そのための資料も図書館には大量にある。適切なものを選んで講義資料として配付することも試みたが、色彩ゆたかなものも多く、学生諸君が直接見た方が効果的なのではないかと、最近では思っている。ただし地図の類は、あれこれあさってはコピーをとり、ずいぶん利用させてもらった。

軍事関係の分野は、ほとんど新しく勉強しなければならなかった。この分野の文献は、本学図書館にあまり揃ってはいなかった。そのなかで次の二つの文献は大変便利であった。一つは小沢郁郎『世界軍事史』(同成社、1986;本館開架)で、第一次世界大戦に至るまでの総括的な軍事史が自然史的方法で描かれていて役に立った。もう一つは旧ソ連で出版された『ソヴェト軍事百科事典』(全8巻;本館開架)である。これは、世界大戦の位置を定めるために軍制史をまとめる必要上、ソ連軍大学の『兵術史』を研究しているとき書庫で見つけたもので、ソ連独自の軍事学や戦略・作戦・戦術の世界史的発展型の理解と整理を助けてくれた。

まだまだ勉強不足で、さきの『兵術史』もまだ理解できないところや不明箇所がある。これからも、オンライン検索や書庫内を歩き回ってさらに探求しなければならないだけでなく、しばらく利用していない他大学や国会図書館をも利用する必要に迫られている。

# 図書館はおそろしい

文＝川谷茂樹

(かわたに しげき／法学部助教授)

世間には、本に対してフェティシズム(物神崇拜)の嗜好をもつ人、すなわち(本フェチ)がいる。本フェチの知人に言わせると、ページに折り目をつけたり、鉛筆やペンで線を引いたり、書き込みをいれたり、帯や函を紛失したりするのは、とんでもない暴挙らしい。この本フェチ氏は、そういう憂き目にあつたほくの本を見とがめては、「本がかわいそうだ」と嘆いていた。

その嘆きの意味が皆目わからないほくは、幸か不幸か、本フェチではない。まっさらな状態の本よりも、自分が一度なりとも通読してそれなりに汚れた本の方が好きだ。なんとなく安心感がある。だから、本を買うのはあまり好きではない。でも、他の物、たとえば食べ物や衣服、鍋や皿などに比べると、本を買う方が抵抗感が低い。理由はいろいろある。まず、なぜか知らないが、本を読むという行為が、なんとなく上等・高級なことであるような風潮がある。だから、むずかしそうな本を買うと、それだけで自分がちよつと偉くなったような錯覚に陥ることができる。次に、本は、よほどのことがないかぎり腐らないし、壊れない。最後に、じつさいにおもしろい本が、ときどきある。

こう書くと、ほくは本フェチではないにせよ読書は好きだと思われるかもしれないが、そうではない。読書はその間基本的に他のことはできないという、稀にみる排他的な行為である。つまり、身も心も捧げるという(ある種宗教的な)姿勢が要求される。だから、熱心に本を読んでいる人を傍から見ると、かなり不気味である。たまににやにやしたりされると、恐怖感すらおぼえる。また、それだけ熱心に読んでいる本が「よい」本だったかどうかは、読んでみないとわからない。ほくは器量が狭いので、箸にも棒にもかからない本を読んでしまった日には、悲憤慷慨する。にもかかわらず、そう判断した自分がバカだっただけというケースもある。そ

んなおそろしい行為を本気で「趣味」などと言える人の気が、ほくには知れない。

そんなほくにとって読書は、いまだ日常茶飯の行為ではなく、なにやら儀式めいている。この儀式に必要な唯一の道具は、鉛筆である。ほくは大事だと思ふところに線を引ながら読む。そうしないと、本の内容はおろか、読んだことがあるかどうかさえ忘れてしまうからだ。先日、自宅のソファに寝転がってその儀式を執行していると、小2の娘から「何をしているのか。」とたずねられた。ほくは少し逡巡して「お勉強。」と答えたのだが、「それはお勉強ではない。大事なところに線を引いているだけだ。」と容赦なく否定された。絶句しつつ、「じゃあほくはいつだって「お勉強」しているのだろう(実は全然していないのかもしれない)」と、背筋が凍る思いをした(今もしている)。子供はおそろしい。

この「大事なところに線を引く」という習慣は、もともと亡父のものである。たまに父が熱心に線を引いた本を読むことがあるが、「なぜよりによってここに？」というところに線を引いていたり、突然線がなくなって途中で挫折したさまなどがあからさまにわかって楽しい。ということは、もしかすると非常に恥ずかしい習慣なのかもしれないと思うが、今さらやめられるものでもない。習慣もおそろしい。

しかしなんと言ってもいちばんおそろしいのは、大学図書館の書庫である。視界のすべてを占領する背表紙＝「人類の叢智」たちを眺めていると、体調によっては吐き気すら催しかねない。また、「ちよつと調べものに」行つたはずが、棚から棚へとさまよひ歩くうちに半日ほど出られなくなったこともある。本フェチには天国かもしれないが、ほくにはおそろしいところだ。

# 読書の場所

文=山中亮

(やまなか あきら／経営学部講師)



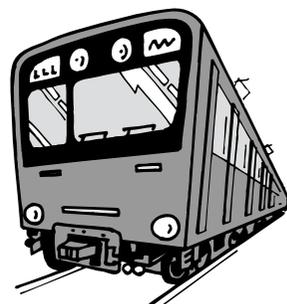
幼い頃、週末になるとドライブ好きの両親に連れられてよく車で遠出をした。そんな時、私は必ず一冊の本を抱えて車に乗り込んだ。それは、当時一番のお気に入りだった図鑑「両生類・爬虫類」であった。周囲の大人たちはたいそう気持ち悪がっていたようだが、図鑑の中には、これまで見たこともないような幾何学模様をまとった蛇やカラフルな模様の蛙が生き生きと暮らしていた。その頃私にとって車で出かけることは、狭い空間の中で規則的に体が揺さぶられるだけのとても退屈なものであった。そんな時この図鑑をめくると、魅惑的な世界が目の前に現れ、あつという間にその中に入り込むことができた。いつからか目的地への到着を心待ちにするというよりも、車中での異世界旅行を楽しむようになっていた。しかし、大きくなるにつれて日々の生活は忙しくなり、家族で小旅行に出かけることもほとんどなくなった。さらに自動車免許を取得してからというもの、車内では運転手という役割が私に与えられるようになってしまった。おかげで、車の中で本を開くなどということはめっきり減ってしまった。

大学院へと進んでからは、読む本といえばもっぱら自分の研究に関わるような専門書ばかりになった。この手の本は横に辞書を置きながら読む必要があったり、とても分厚くて持ち運びに不自由だったりするので、学校や家でどしりと腰を据えて読むことがほとんどであった。私の読書はいつからか、机上での専門書が中心となってしまった。

ところが昨年北海学園大学に赴任してから、少し状況が変わった。駅と直結しているという利便性や雪道運転の不安などを考えて、大学院時代から前職までずっと続けてきた愛車での通勤から、地下鉄通勤に切り替えたのである。札幌は私にとって生まれて初めての土地であるため、はじめのうちしばらくは車内広告など、地下鉄の中にあるものすべてが新鮮で、それらを見ているだけでも自宅と大学の往復の時間を有意義に過ごすことができていた。しかしだんだんと生活に慣れていくにしたがって、それにも飽きてきてしまった。

以前の家族ドライブの時に経験したなんともうっとうしい退屈感が頭をもたげてきたのである。そんな時ふと、「暇つぶしに本でも読むかな」という思いが沸いてきた。その日のうちに大学生協で目に入った手頃な小説を一冊買って、帰宅の途につく車内でおもむろに開いてみた。はじめのうちは、その小説の中に入っていくことに難儀したが、数日のうちにそんな難しさも消えて、地下鉄の中はすぐに魅力的な新世界へと変貌していった。それからというもの、通勤時間は一日の中でもとても楽しい時間のひとつとなった。

しかし私の自宅は大学からあまり遠くないところであり、実際に地下鉄に揺られている時間というのはかなり短い。引越してきた当初はそれで便利さを感じていたので、特に問題はなかったが、正直今となっては少々物足りなさを感じている。毎朝地下鉄に乗り込むと、心待ちにしている別世界の扉を開けて、その世界の中へと一歩ずつ足を踏み入れていく。ところがちよとどその世界に馴染んできた頃にいつも決まって、「がくえんまえー」というなんとも非情な呪文が耳元で繰り返され、私は一瞬にして現実世界へと引き戻されてしまうのである。おかげで最近では、もう少し遠くに引越そうかと本気で考え始めている。

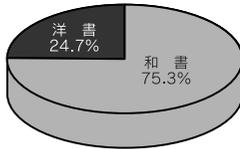


# 図書館レポート 2006

## 蔵書冊数 (2006年3月31日現在)

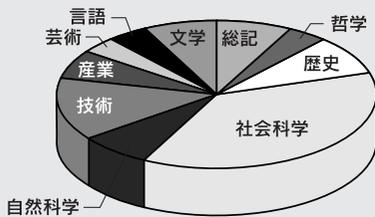
	和書	洋書	合計
蔵書冊数	574,232冊	188,721冊	762,953冊

ちなみに2005 (H17) 年度の1年間の受入図書冊数は、24,883冊でした。学術雑誌は、9000種を超えるタイトルを保管しています。



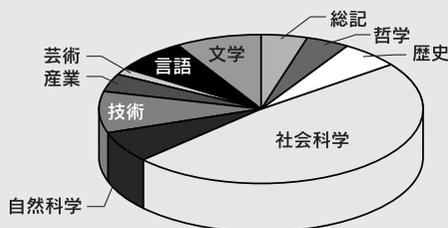
### 【和書】

000 総記	43,727冊	7.6%
100 哲学	23,240冊	4.0%
200 歴史	49,608冊	8.6%
300 社会科学	213,748冊	37.2%
400 自然科学	41,943冊	7.3%
500 技術	78,883冊	13.7%
600 産業	36,373冊	6.3%
700 芸術	20,712冊	3.6%
800 言語	23,510冊	4.1%
900 文学	42,488冊	7.4%
計	574,232冊	100%



### 【洋書】

000 総記	8,699冊	4.6%
100 哲学	8,099冊	4.3%
200 歴史	11,092冊	5.9%
300 社会科学	91,022冊	48.2%
400 自然科学	12,782冊	6.8%
500 技術	17,038冊	9.0%
600 産業	7,381冊	3.9%
700 芸術	2,786冊	1.5%
800 言語	13,587冊	7.2%
900 文学	16,235冊	8.6%
計	188,721冊	100%



## —カウンター・サービス関係統計—

	2003年度	2004年度	2005年度
入館者数	439,823人 (1日当り1,517人)	405,999人 (1日当り1,440人)	399,609人 (1日当り1,412人)
貸出者数	延べ34,147人 (うち学生 29,421人)	延べ36,771人 (うち学生 25,384人)	延べ37,062人 (うち学生 34,276人)
学生一人当りの貸出回数	4.0回	4.1回	4.1回
貸出冊数	56,553冊 (うち学生 46,271冊)	46,493冊 (うち学生 35,632冊)	61,810冊 (うち学生 55,856冊)
学生一人当りの貸出冊数	6.6冊	5.2冊	6.9冊
PCブース利用者数	延べ 4,272人	延べ 3,145人	延べ 3,197人
AVブース利用者数	延べ 3,638人	延べ 3,515人	延べ 4,244人

## —レファレンス・サービス関係統計—

### 【学内での調査】

	教職員 (前年度対比)	学生 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
文献所蔵調査	31件 -8件	93件 +44件	124件 +36件
事項調査	11件 +1件	11件 -5件	22件 -4件

### 【学外に調査依頼・学外からの調査依頼】

#### ●複写業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	530件 +69件	7件 -23件	537件 +46件
学外から依頼	853件 +660件	0件 ±0件	853件 +660件

#### ●貸借業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	172件 +21件	2件 -7件	174件 +14件
学外から依頼	229件 +160件	0件 ±0件	229件 +160件

#### ●文献所蔵調査

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	23件 ±0件	0件 ±0件	23件 ±0件
学外から依頼	5件 -10件	0件 ±0件	5件 -10件

### 【学外者利用者数および本学関係者他利用者数】

学外者数	29人	他館利用者数	49人
------	-----	--------	-----

## 【図書委員】

- 経済学部 笠嶋 修次
- 経営学部 黒田 重雄
- 法学部 鈴木 美佐子
- 人文学部 徳永 良次
- 工学部 小野 恭平

## 【図書選定委員】

- 経済学部 笠嶋 修次
- 経営学部 早川 豊
- 法学部 鈴木 美佐子
- 人文学部 安武 秀岳
- 工学部 小野 恭平

好評につき、展示期間を延長します！

# レオナルド

平成17年

12  
1

平成18年

7  
31



# ダ・ヴィンチ展

図書館展示企画No.44

展示場所 図書館1F自由閲覧室

されたキリストとキリスト教の起源に関わる隠された暗号を作品のなかに読みとっていきます。「最後の晩餐」の中のキリストの左側に描かれた聖徒は、女性に見える。彼女は実はキリストの妻ではないか？といった衝撃的な仮説を立て検証していきます。聖杯伝説などにも触れ、西洋文明の根幹に関わるキリストとキリスト教の歴史への興味をかき立てる内容でした。ダ・ヴィンチが教会に批判的だったのは確かなようです。

これほど、森羅万象に興味を持ち、人間の生活を向上させる科学技術から芸術にいたるまで、同時に打ち込めたコンピュータのような頭脳と深い探求心、それを裏付ける人間愛の持ち主は、歴史上、他に並ぶ者はいないのではないのでしょうか。ダ・ヴィンチは、まさに、人類史上、最高の天才だと思います。今後とも、ご期待に添うよう頑張りますので、展示会を、よろしくご愛顧ください。

## 編集後記

みなさんこんにちは、ビッグフットです。気温も少しずつ上がり、夏が近づいているのを感じさせる今日この頃、いかがお過ごしでしょうか？「も～い～くつ寝～る～と～、な～つ～や～す～み～♪」、というわけで、夏休みが待ちきれない!! まだ予定計画してない! 長期の休みを利用して旅行に行きたいという人も多いと思います。…旅…してみたいなあ…と、思っている人も行く人も、こんな本はいかがでしょう。

「366日空の旅:かけがえのない地球」請求記号 290.87/ARI ID:0527246

この本には、世界の色々な場所の写真が366枚載っていて、見ているだけで旅をしたくなること間違いなし!! 開いたページの風景目指して計画を立てる、なんていうのもおもしろいかな～と思いますが、参考までにぜひ、読んでみてはどーですか？

インドア派の人には、個人的におすすめなのが

「去年ノアールで」請求記号 914.6/SEK ID:0546492

…変人が好きな人にはたまらんですよ…ニヤリ…

映画「ダ・ヴィンチ・コード」が上映されたり、テレビで特集が組まれたり、今、「レオナルド・ダ・ヴィンチ」に熱い注目が集まっています。

本学図書館では、昭和63年に図書展示会を始めてから今回で18年経ち第44回目の展示になります。

今回ダ・ヴィンチについて展示しようと思いついたのは、東京の「六本木ヒルズ美術館」で2005年10月～12月頃、「ダ・ヴィンチ展」が開催されたことをインターネットで知り、丁度、そのころ「ダ・ヴィンチ・コード」の出版もありましたので、タイミングが良さそうな気がして、展示することにしました。

たまたま、ダ・ヴィンチの手稿・ノート(模写)が書庫に以前からあり、いつか展示しようと思っていたところでしたが、まさか、これほどまでに、映画化されたり、ダ・ヴィンチがテレビで取り上げられたり、一種のブームになるとは、思いませんでした。

現在、放映されている「ダ・ヴィンチ・コード」は、まだ、観ていませんが、この映画と原作をベースにした、いくつかのテレビ特集(TBS特番、History Channel)は観ました。番組では、ダ・ヴィンチの謎に満ちた生涯と彼の絵画「最後の晩餐」や「モナリザ」彫刻等に隠

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第28巻2号 (通巻178号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード